



第4章

信長包囲網と 岐阜城時代の信長

元亀元年(1570)～天正3年(1575)

【信長 37歳～42歳】

第4章

信長包囲網と岐阜城時代の信長

元亀元年(1570)～天正3年(1575)

【信長 37歳～42歳】

元亀 元年(1570)	37歳	若狭・越前に向け出陣するも浅井長政離反により撤退 姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破る 阿波から摂津に入った三好三人衆を攻める 石山本願寺が挙兵 近江宇佐山城の森可成、浅井・朝倉連合軍と戦い討死(坂本の戦い) 浅井・朝倉連合軍、比叡山延暦寺と組み信長と戦う(志賀の陣) 弟信興、伊勢国長島の一方向一揆に攻められ自刃 義昭と関白二条晴良の仲介により浅井氏及び朝倉氏と和睦
元亀 2年(1571)	38歳	比叡山延暦寺焼き討ち
元亀 3年(1572)	39歳	足利義昭に十七条の意見書をつきつける 織田・徳川連合軍、三方ヶ原の戦いで武田信玄に敗れる
天正 元年(1573)	40歳	義昭挙兵 榎島城を攻め、義昭を降す 朝倉義景自刃し朝倉氏滅亡 小谷城の浅井長政自刃し浅井氏滅亡
天正 2年(1574)	41歳	越前一方向一揆の討伐のため、羽柴秀吉を派遣 長島一方向一揆を殲滅
天正 3年(1575)	42歳	長篠・設楽原の戦いで武田勝頼軍に大勝 越前一方向一揆を討伐 従三位権大納言、ついで右近衛大将に任ぜられる 長男信忠に織田家の家督と岐阜城を譲る

4-1 越前朝倉攻め(金ヶ崎の戦い)

永禄13年(1570)、信長は將軍足利義昭^{あしかがよしあき}の名代として諸大名に上洛を命ずる触状を出しますが、越前の朝倉義景^{あさくらよしかげ}がこれに背きます。信長が越前に兵を挙げたところ、同盟関係にあった妹婿の浅井長政の裏切りにあい、挟撃の危機に瀕します。これを起点に各地の反信長連合との長い攻防が始まります。

若狭武田氏 征伐としての出陣

朝倉義景が信長の上洛の触状に背いて上洛しなかったことは、京都に新たに成立した室町殿(天皇と信長の連合政権)への反逆と位置付けられ、信長に成敗の口実を与えました。永禄13年(1570)4月20日、織田・徳川連合軍は30,000の軍勢で越前に向け京を出陣します。このとき織田軍の武将のほかに池田勝正・松永久秀といった近畿の武将、公家である飛鳥井雅敦^{あすかいまさあつ}・日野輝資^{ひのてるすけ}も従軍しました。

経過

越前の朝倉義景領に入った織田・徳川連合軍は、4月25日、まず天筒山城^{てづつやま}を攻め、家康が1日で城を落とします。すると、その翌日には金ヶ崎城の朝倉景恒^{かみづつね}が羽柴秀吉の開城勧告に応じ、さらに、疋田城^{ひきだ}も開城します。朝倉軍は敦賀郡を放棄するように退き、代わりに戦線が狭く防御に向いた地形の木ノ芽峠^{きのめとうげ}一带の防衛体制を強化します。各城を落とし勢いづく織田軍は、木ノ芽峠を越え、越前本国へ突入しようとはしますが、信長の義弟である浅井長政が反逆したとの報を受けます。



金ヶ崎城址(福井県敦賀市)

4-2 浅井長政の離反

金ヶ崎^{かねがさき}の戦いでは、織田軍が優勢に合戦を進めていましたが、浅井長政の裏切りにより、形勢が逆転し、「金ヶ崎の退き口^の」として有名な織田軍の決死の撤退戦となっていきます。

離反の急報

浅井長政の反逆の報を受けた信長は、当初「虚説たるべき」(『信長公記^{しんちょうこうき}』)と、とりあいませんでしたが、その後次々に入る知らせを受け、事実であることを認め、越前攻めからの撤退を決意しました。これにより、織田・徳川軍は越前と北近江からの挟撃を受ける極めて不利な状況となりました。

長政の反逆については、近江・若狭の情報を集めていた松永久秀が浅井方の不審な動きを察知して通報したという説があります(『朝倉記』)。また、信長の妹で長政の妻となったお市の方が、信長に両端を紐で結んだ小豆袋を送り、長政の反逆によって、両側がふさがり袋^{ねずみ}の鼠の状態であることを知らせたという逸話(『朝倉家記』)もあります。



浅井長政肖像(東京大学史料編纂所蔵)模写

撤退戦

撤退にあたっては、羽柴秀吉が殿軍^{でんぐん}(最後尾の部隊)となり、信長本隊の帰還を援護します。この時、秀吉が自ら名乗りをあげ殿軍を務めたともいわれています。『寛永諸家系図伝』^{かんえいしよかけいずでん}『徳川実紀』^{とくがわじつき}などでは徳川家康もこれに加わったとされ、また、松永久秀が撤退の先駆けをしたといわれています。

信長は撤退に際し、近江豪族の朽木元綱^{くつきもとつな}の協力を得て、敦賀^{つるが}から朽木を越え(朽木越え)、4月30日に京に戻りますが、その時の信長の手勢はわずか10人程度であったといわれています(『継芥記』^{けいかいぎ})。その後、池田勝正率いる織田本隊も撤退に成功しますが、織田軍諸将の行動は極めて統率がとれたものであったといわれ、朝倉軍に攻撃の隙を与えず、撤退時の被害を最小限に食い止めることができました。信長は、殿軍を務めた秀吉に黄金数十枚を与え、その貢献を称えたといわれています。

信長は、京到着後、改修中の御所を視察するなど、窮地を脱してきたという状況をおくびにも出さず、平然と振舞う一方、5月9日には岐阜に向かい、長政討伐のための準備にとりかかりました。



お市肖像(東京大学史料編纂所蔵)模写

4-3 姉川の戦い

浅井長政の裏切りと越前で織田軍の敗戦は、近江の反信長勢力を奮起させることとなりました。信長は岐阜に帰国後、軍備を整えると浅井・朝倉連合軍への反撃に出ます。

浅井・朝倉連合軍 開戦へ動く

織田軍撤退後、朝倉義景は敦賀に座し、浅井長政と密に連絡を取り合いながら。5月11日に、朝倉景鏡率いる大軍を近江に向かわせます。

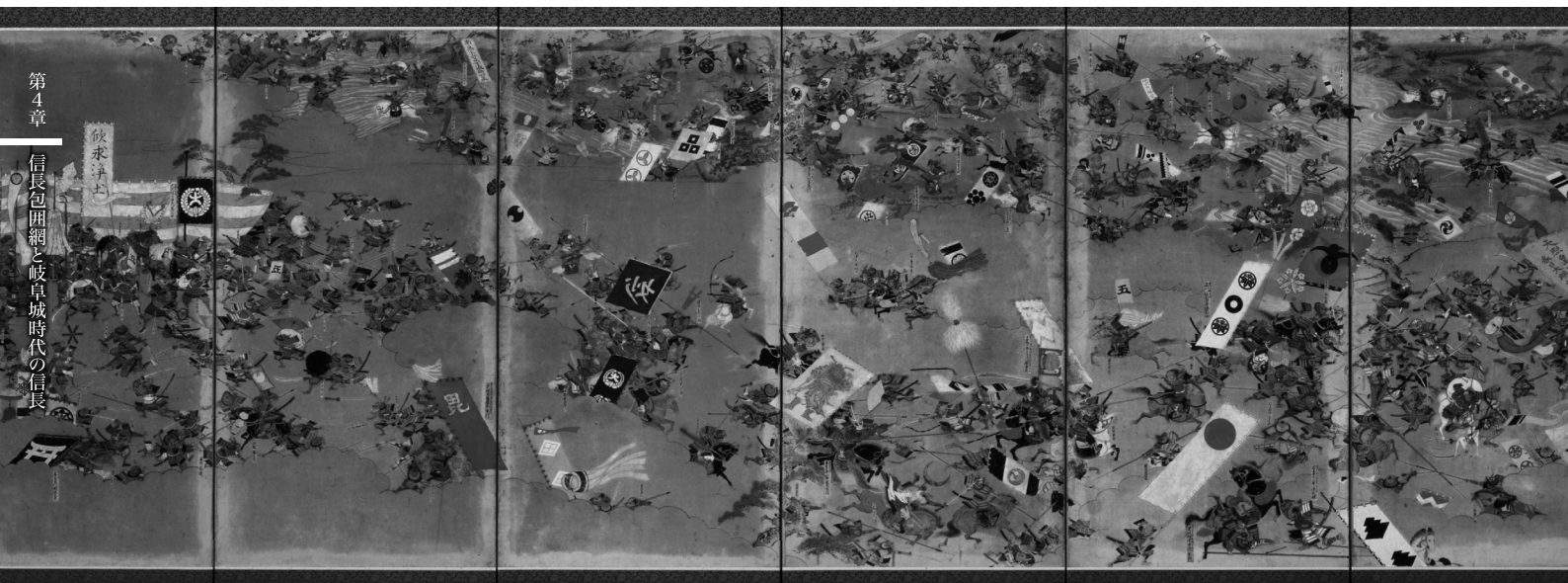
浅井・朝倉連合軍は、まず美濃の垂井・赤坂周辺を攻め、織田軍の来襲に備えます。続いて美濃国境付近の長比・荻安の城砦をおさえますが、長比城の堀秀村が織田軍の調略(政治的工作)によって離反したため、長比・荻安両城は織田軍の手に渡ってしまいます。

信長出陣

この知らせを受けた信長は、6月19日、長比城に入り、その2日後には浅井方の小谷城にまで迫ります。虎御前山に本陣を置くと、森可成・坂井政尚・斎藤利治・羽柴秀吉・丹羽長秀らに命じ、小谷城の城下町を焼き払わせます。

6月24日、織田軍は姉川の南にある浅井軍の横山城を包囲します。信長は竜ヶ鼻に本陣を置きますが、ここに徳川家康が合流し、織田・徳川連合軍の合計は約25,000となります。

一方、小谷城東の大依山に陣を張る浅井方に



姉川の戦い(福井県立歴史博物館蔵)

も、朝倉景健率いる8,000の援軍が合流し、浅井・朝倉連合軍は合計13,000となりました。(※兵数は諸説有)

開戦

6月28日未明、浅井・朝倉連合軍は姉川を前に軍を二手に分け、野村・三田村にそれぞれ布陣しますが、織田・徳川連合軍は即座に対応し、徳川軍が西の三田村勢へと向かい、東の野村勢には信長の馬廻^{うまわり}及び西美濃三人衆^{いなばよしみち}(稲葉良通・氏家^{うじいえ}ト全・安藤守就^{あんどうもりなり})が向かいます。

午前6時頃に戦闘が始まると、「火花を散らし戦ひければ、敵味方の分野は、伊勢をの海士の潜^{しん}きして息つぎあへぬ風情なり(『信長公記』)」という激戦になります。

しかし、浅井・朝倉連合軍の陣形が次第に延び

きったため、そこを逃さず徳川軍が側面から攻撃、朝倉軍、浅井軍はともに敗走することになります。結果的に織田・徳川連合軍が1,100余りを討ち取り勝利しました。

合戦の影響

姉川の戦いにおける浅井氏の被害は甚大で、長政の重臣遠藤直経や実弟浅井政之をはじめ、多くの戦死者を出しました。

しかし、この時点では浅井・朝倉連合軍にはまだ余力は残っていて、近江、越前周辺では比叡山^{ひえいざん}の僧兵衆や石山本願寺の一向一揆^{しが}と手を結び、湖西の志賀郡などで激しい攻防戦が繰り返されました(志賀の陣)。



姉川の戦い跡地

4-4 三好三人衆

姉川の戦いの勝利により東山道の確保ができて、信長の環境は好転しますが、その頃、一度は四国へ敗走した三好三人衆が再度畿内に攻め入ってきます。

三好三人衆再登場

姉川の戦いから1か月、将軍義昭の仮御所六条本圀寺ほんこくじの襲撃に失敗した三好三人衆が摂津に現れ、野田・福島よしのの両砦に陣取ります。6月、摂津の三守護の一人である池田勝正の家中の内紛で、同族の一部が三好三人衆に通じていたとして殺害されますが、その残党が石山本願寺に落ちのびます。これが三好三人衆の再登場の契機になったともいわれています。この三好三人衆の一連の動きは、浅井氏、朝倉氏、六角氏と連携した軍事行動であったといわれています。

この時、三好三人衆の兵力は8,000余り(諸説有)で、摂津伊丹城いたみ、河内の信貴山城かわちの二方面に侵攻し、河内の若江城、高屋城を一気に攻め落とし、合わせて300の兵をほぼ全滅させたといわれています。

織田軍布陣

摂津・河内・大和の大名たちの反撃が結果を出せない中、織田軍が8月26日に天王寺に布陣します。この戦いは幕府軍としての軍事行動であったため、畿内周辺から多数の援軍が参加し、織田勢は40,000に達したともいわれています。この合戦には将軍義昭自らも出陣し、公家衆も加わりました。

この大軍を前にして、2日後の8月28日には三好三人衆方からは離反者も出て、三好為三郎みよしさんが信長に降参します。信長は義昭とともに海老江えびえに陣を移し、「大鉄砲」(大砲)を含む銃撃戦を展開すると、三好三人衆方は和睦交渉してきましたが、信長はこれを受け入れず徹底的に攻め滅ぼそうとしました。

4-5 本願寺の挙兵

元亀元年(1570)三好三人衆^{げんき}を目前に控えたとき、再び信長に不測の事態が発生します。石山本願寺が信長軍に向けて蜂起したのです。戦国時代最大の宗教的武装勢力である本願寺と、天下布武を目指す信長との軍事的・政治的決戦が始まりました。

石山本願寺の 成り立ち

天文元年(1532)に本拠である山科本願寺が焼^{ごぼう}き討ちに遭ったことで、京都に近い大坂御坊へ本願寺の本拠を移し、石山本願寺と改称しました。細川晴元(山城、摂津、丹波守護)は、本願寺の武力を恐れ、たびたび石山を攻撃しましたが、石山は守りに適した土地であり、本願寺が軍備を進めていたために、苦戦が続いていました。また、11世法主の顕如が石山本願寺の准門跡(門跡は皇族・貴族が僧籍に入り住職となる際の呼称)になるなど、中央権力との結びつきも強くなり、本願寺の権力は年々増大していきました。



顕如肖像(東京大学史料編纂所所蔵)模写

信長と本願寺

永禄11年(1568)畿内をほぼ制圧した信長は、将軍家の名目で畿内の本願寺系の末寺に矢銭^{やせん}(軍資金)を要求し、応じない寺は取り潰すなどの措置を行いました。本願寺には「京都御所再建費用」の名目で矢銭5,000貫を請求し、顕如はこれを受け入れ支払っています。

永禄12年(1569)、信長は三好氏征伐を進めますが、この頃、本願寺は三好三人衆や信長に追われた六角氏とも懇意にし、また浅井氏及び朝倉氏とも連携していました。

突然の蜂起

元亀元年(1570)9月12日、三好三人衆攻略のために摂津福島に陣を敷いていた織田軍に、本願寺が蜂起します。「信長が本願寺を破却すると言ってきた」として、顕如は本願寺門徒に檄を飛ばし、攻撃を仕掛けます。本願寺軍は石山を出て、14日に淀川堤で信長軍と直接激突しました。

織田軍が三好三人衆と本願寺を相手に苦戦しているとき、浅井氏及び朝倉氏の30,000の大軍が背後から攻めかかってきます。この戦い(坂本の戦い)で、織田軍の名将、森可成^{もりよしなり}が命を落とし、さらに浅井・朝倉連合軍は比叡山延暦寺^{ひえいざんえんりやくじ}と組み、信長と戦うことになります(志賀^{しが}の陣)。

本願寺軍は石山に戻り籠城の構えに入ると、織田軍は危機的状況を脱するため、朝廷に働きかけて本願寺軍に進軍を止めるよう勅書を出し、本願寺との戦闘を避けました。その成果が表れ、石山本願寺の第一次挙兵は、1か月もたたないうちに実質的には収束に向かいます。

4-6 長島一向一揆



石山本願寺拳兵とほぼ同時期に、伊勢国の長島願證寺で一向一揆が発生しました。

長島一向一揆とは

信長は永禄10年(1567)から北勢に攻め入り、神戸・関・長野の各氏、さらに北畠氏^{きたばたけ}を滅ぼし、ほぼ伊勢の北部を制圧していましたが、なおも信長に反抗していたのが、木曾・長良・揖斐の三川に囲まれた地帯にある長島でした。ここに位置する願證寺は、石山本願寺の末寺で、輪中の強みを活かした大小の城砦に守られた城塞都市でした。東海地方の一向宗の中心として、その門徒は、およそ100,000人を数え、長島城城主伊藤重晴^{しげはる}を追い出し、一向宗門徒による自治を行っていました。

石山本願寺に呼応

元亀元年(1570)9月、本願寺顕如は信長との戦いを始め、全国の一向宗門徒に対し、信長と戦うようにと檄を飛ばしました。長島願證寺もこの顕如の呼びかけに応じ、尾張の小木江城^{やとみ}(愛知県弥富市)を攻め、信長の弟信興^{のぶおき}を切腹させました。

信長軍の苦戦

信長は元亀2年(1571)5月、50,000の軍勢を率いて1度目の長島攻撃を行います。

信長本隊は、津島に陣を敷き、佐久間信盛隊^{さくまのぶもり}は中筋口から、柴田勝家隊は大田口から侵攻を進めますが、輪中の地形を活かした願證寺の戦法に手こずり、織田軍はやむなく周辺村々に火を放ちながら退陣します。長島方は撤退途中にある狭い道に弓兵や鉄砲兵を配置して待ち受けます。撤退戦の最中、柴田勝家が負傷し、その勝家に代わって殿をつとめた氏家ト全^{うじいえぼくぜん}が討死するという大惨敗を喫します。

天正元年(1573)9月、浅井氏及び朝倉氏の攻略に成功すると、信長は再度長島攻撃を行い、長島方に味方した北勢の土豪を降伏させましたが、またも門徒の攻撃に苦戦し、敗走することとなります。

4-7 足利義昭の調停

元亀元年(1570)は、若狭・越前への出陣、姉川の戦い、三好三人衆の登場、石山本願寺の挙兵、浅井・朝倉連合軍との戦い、長島の一向一揆と戦いが続きました(第一次信長包囲網)。
年末に義昭と関白二条晴良の仲介により浅井氏及び朝倉氏と和睦します。

京の治安悪化

信長に敵対する勢力の蜂起が続いたため、信長は京都の治安維持に兵力を割くことができず、10月に京都近郊で一揆がおり、2、3,000人が蔵を破り討廻りを続けましたが、これを鎮圧するまでに2か月もかかりました。

一方、朝倉義景も冬を迎えて、雪が降れば帰国が難しくなるため早く戦を終わらせたいと思っていました。このような互いの状況から、信長も朝倉氏も和議を望んでいました。

一時的な和睦

義昭と関白二条晴良が調停に乗り出しました。三井寺に両者が集まり、晴良が中心となって条件交渉が進められました。浅井長政は領地分けの案を受け入れましたが、信長への不信感が強かった比叡山は調停案に同意しませんでした。その後天皇が安堵の綸旨を出し、義昭の御内書、信長の誓紙、義景の誓紙によって比叡山の所領は保証されました。

再び北近江との戦い

元亀2年(1571)2月、佐和山城の磯野員昌が信長方に寝返ったことを受けて、信長はすぐに佐和山城に丹羽長秀を入れました。佐和山城は近江と美濃の交通路にあたり重要な城であったため、浅井方の打撃は大きく、5月には反撃に出ますが秀吉に退けられます。

信長が一向一揆の拠点、伊勢長島で苦戦している間に、朝倉義景は石山本願寺の顕如の子教如に娘を嫁がせ、同盟関係を強めていました。

信長は8月、浅井攻めに出陣し、一向一揆の拠点、金森(守山市)を攻め、降伏させました。

第一次信長包囲網 (1570年代前半)



第一次信長包囲網

4-8 比叡山焼き討ち

^{よしあき}義昭の調停による和睦は一時的なものに終わりました。^{げんき}元龜2年(1571)年に入ると、北近江との戦いは再開され、^{ひえいざん}比叡山との関係も悪化します。

発端

信長は元龜元年(1570)、姉川の戦いで勝利をおさめますが、その後の野田城・福島城の戦いで浅井・朝倉連合軍は比叡山に立て籠もり、攻防戦(^{しが}志賀の陣)となりました。信長は、比叡山に対し、

織田軍に味方できないなら、中立を守るよう要求を出し、これに従わなければ、^{こんぽんちゅうどう}根本中堂などを焼き払うと通告していました。しかし、比叡山は中立を守らず、浅井・朝倉連合軍に協力する立場をとったため、その制裁として、元龜2年(1571)焼き討ちを実行することになりました。



江戸時代に再建された延暦寺根本中堂(国宝)と回廊(重文)

徹底的な焼き討ち

比叡山は北陸路と東国路の交差する位置にあり、畿内への侵攻を目論む者たちにとって重要な拠点でもありました。また、山上には、数万の兵を擁することが可能な場所もあったとされます。

信長は比叡山が中立を守らない以上、比叡山を徹底的に破壊しようと考えましたが、佐久間信盛さくまのぶもりと武井夕庵たけいせきあんらはこの考え方に反発し、「前代未聞いさの戦」として強く諫めたとされます。

信長はこれに激しく反論し、9月12日、全山の焼き討ちが実行されました。

『信長公記しんちょうこうき』によると焼き討ちによる死者は数千人、ルイス・フロイスの書簡には約1,500人と記されています。

焼き討ち以後

この戦いで延暦寺えんりやくじや日吉大社は消滅し、寺領、社領はことごとく没収され、明智光秀・佐久間信盛・中川重政・柴田勝家・丹羽長秀にわながひでに配分されました。特に光秀と信盛はこの地域を中心に支配することになり、光秀は坂本城を築城することになります。

4-9 反信長陣営の活発化と武田信玄の出陣

元亀2年(1571)になると、信長の勢力拡大を疎んじていた義昭は、自らに対する信長の影響力を相対的に弱めようとして、浅井氏・朝倉氏・三好氏・石山本願寺・延暦寺・六角氏・甲斐の武田信玄らに御内書を下しはじめ、反信長陣営が形勢されていきます。

反信長勢

元亀3年(1572)は、浅井長政、朝倉義景をはじめ、河内・大和・摂津で独自の軍事行動を展開していた三好義継と松永久秀父子、南近江の六角承禎父子ら、反信長勢が各地で活発な動きを見せます。その動きは以下の通りです。

この時期、信長は足利義昭に対して17カ条からなる意見書を送っています。その内容は「天皇への奉仕を怠っている」「御内書には信長が副状を出すという約束を守っていない」「元亀という年号が不吉なので改元を申し入れたのに、その費用を進上していない」などと厳しいもので、これにより信長と義昭の関係は決定的に悪化します。

1月14日 顕如、信長が出陣したら、背後を脅かすよう、武田信玄に書状を送る。

3月5日 信長、北近江へ出陣。浅井長政の小谷城に対し、付け城を築き包囲。長政が北近江に釘付けとなったことで、美濃と京都を連絡する経路は安泰となり、近江の戦況は信長有利に推移。しかし、前年から河内・大和・摂津で独自の軍事行動を展開していた三好義継と松永久秀父子が、畠山昭高の領内・河内交野城を攻め、摂津の伊丹忠親は信長方の扱いに不信感をもって伊丹に帰り、高槻城の和田惟長と縁戚関係を結び申し合わせて義継に通じる。

4月 細川昭元と三好義継が同盟を結び、紀州の門徒らが本願寺に入るなど、反信長陣営の結集が進む。

5月 信玄から義昭に忠節を誓う誓紙が届き、朝倉義景も出陣に備える。一方、信長方は佐久間信盛、柴田勝家等の援軍を河内に送ったため、松永・三好の両名はそれぞれ大和信貴山城、河内若江城に籠ることになる。

7月 信長は北近江に再び出陣して虎御前山砦を築き、朝倉軍による来援を阻止できるようにして小谷城の攻囲を強める。

8月 朝倉義景の家臣前波吉継、富田長繁が織田軍に降伏。

9月 信長は足利義昭と武田信玄を通じ石山本願寺との和睦交渉を進めいたが、この交渉は途中で放棄。

武田信玄の出陣

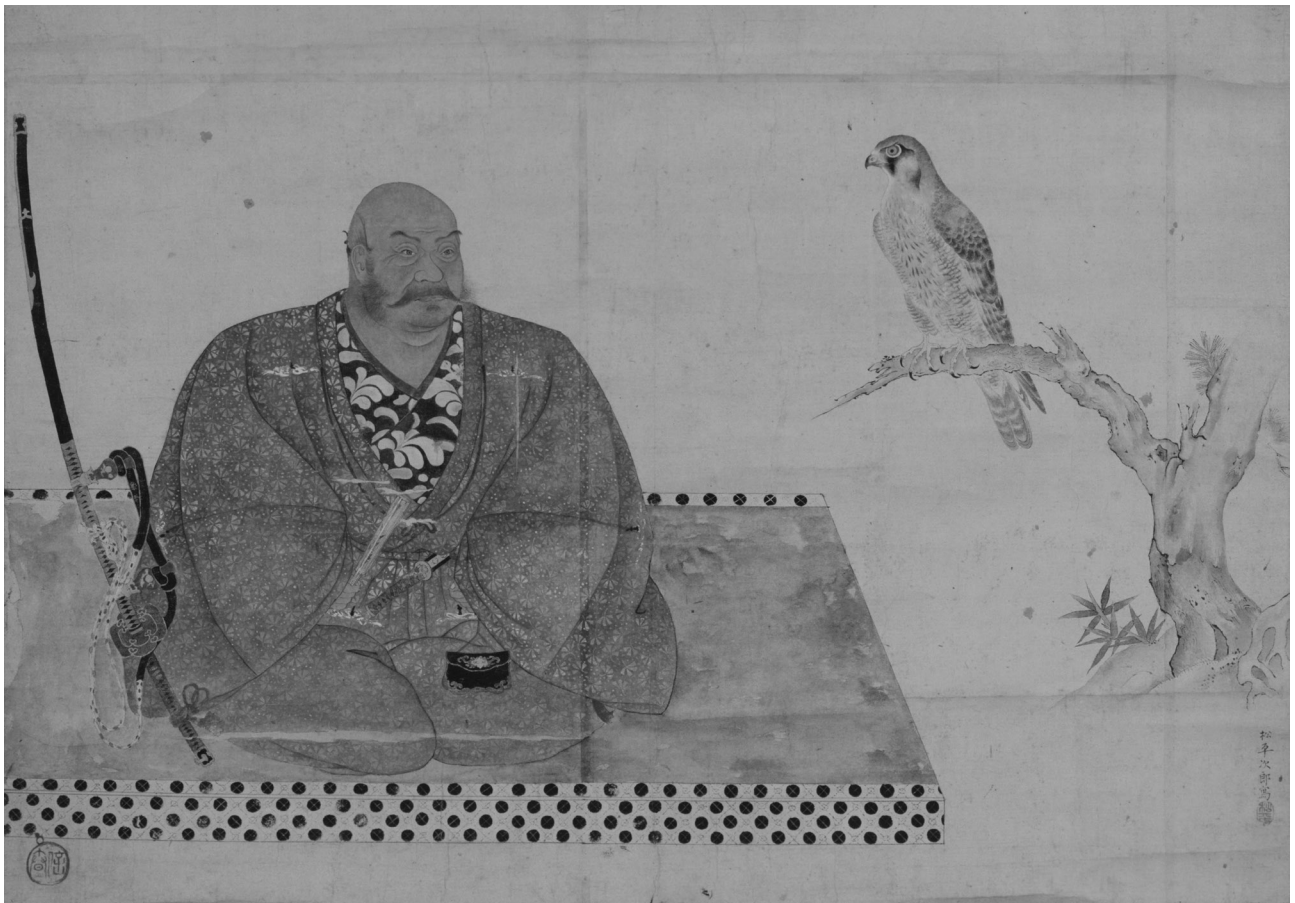
甲斐の信玄は駿河を併合すると三河の家康や相模の後北条氏、越後の上杉氏と敵対していましたが、この頃、信長は義昭の命で武田・上杉間の調停を行なっており、信長と武田の関係は良好であったとされています。

元亀2年(1571)9月に信長が比叡山延暦寺を焼き討ちにすると、寺社との共存政策をとってい

た信玄は信長を「天魔の変化」と非難しました。なぜなら信玄は延暦寺を甲斐に移して再興させようとしていたほどの仏法の庇護者だったからです。

反信長陣営は武田信玄の出陣を待ち望んでいましたが、同年末に後北条氏との甲相同盟を回復させると、ついに信玄は三河への侵攻を企てます。

ルイス・フロイスの『日本史』に武田信玄は「織田信長が最も煩わされ、常に恐れていた敵の一人」と書かれており、信長が支配する地域において、武田軍の強さは天下一といわれていました。



武田信玄像(東京大学史料編纂所蔵)模写

4-10 三方ヶ原の戦い

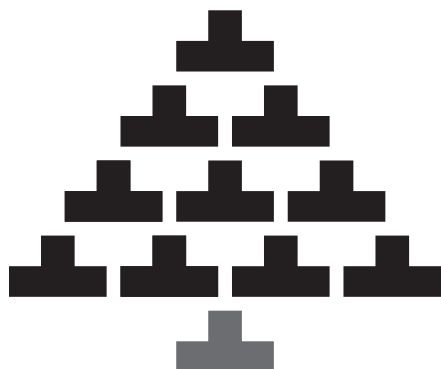
元龜^{げんき}3年(1572)、武田信玄は25,000の軍勢を動員した西上作戦として、遠江国・三河国・美濃国へ同時に侵攻し、二俣城^{ふたまた}を降伏させた後に徳川家康と戦います。この三方ヶ原^{とおとうみ みかたがはら}の戦いは、後に江戸幕府を開く徳川家康の「生涯の負け戦」とされています。

開戦

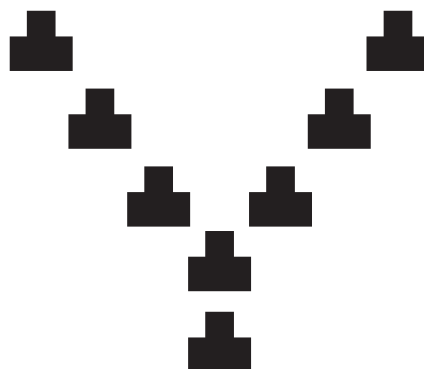
元龜3年(1572)徳川軍の遠江国の要であった二俣城が落とされた後、当初、徳川家康と佐久間信盛は、武田軍の次の狙いは浜松城であると考え、籠城戦に備えていました。ところが武田軍は、二俣城攻略後、遠州平野内を、三方ヶ原台地を目指して西進し、浜松城を素通りしていきました。しかし、これは武田軍の策略で、逆に魚鱗^{ぎょりん}の陣を敷き、万全の構えで待ち構えていました。敵の罠に嵌ったことに気付かず、家康は浜松城での籠城策から武田軍を背後から襲う作戦に変更し、信長からの援軍3,000を加えた連合軍を率いて浜松城から出陣しました。敵の大軍を見た家康は、急遽、

鶴翼^{かくよく}の陣をとり戦闘を開始しますが、武田軍の圧倒的な強さの前に不利な隊形となり、大敗を喫します。日没からの2時間ほどの戦いで、多数の戦死者を出して敗走します。武田軍の死傷者200人に対し、徳川軍は、鳥居四郎左衛門、成瀬正義、本多忠真^{ほんだただざね}といった有力な家臣をはじめ、死傷者2,000人を出したといわれています。武田軍の狙い通りの展開となりましたが、家康家臣の本多忠勝などの決死の防戦により、家康本人を討ち取るには至りませんでした。

圧倒的な強さの武田軍を前に、徳川軍の各隊が次々に壊滅し、家康自身も討死寸前まで追い詰められ、命からがら浜松城へ逃げ帰ります。この敗走は、後の「伊賀越え」と並んで徳川家康人生最大の危機とも伝えられています。



魚鱗の陣



鶴翼の陣

4-11 信長包囲網

信長の躍進に疑義を抱く足利義昭は、信長に対抗する勢力を集めようと暗躍します。

第二次包囲網

信長の権力により、室町幕府は一時的に再興しますが、義昭が「副将軍」の地位を用意しても信長は辞退し、「殿中御掟」を制定して義昭の行動を暗に制限します。義昭は、後見人である信長の所業について疑義を抱き始めていました。

義昭は浅井・朝倉・六角といった畿内大名衆や、本願寺や延暦寺といった宗教勢力や一揆衆、さらには東国の強豪として知られていた甲斐の武田信玄に御内書を送ります。

これに対して、信長は抗戦する諸大名と義昭の関与を疑いつつも果敢に攻撃します。元亀2年(1571)には磯野員昌を降伏させて佐和山城を落とし、長島一向一揆では弟の織田信興を失いましたが、苛烈に攻め立てて一揆衆を封じ込めました。また、同年には比叡山を焼き討ちしています。

元亀3年(1572)には、北近江の浅井長政に対して本格的な攻勢を開始します。小谷城を包囲したことで美濃と畿内を結ぶ兵站線が安定したため、戦況はますます織田軍へ有利に傾いていきました。

しかし、この年の三方ヶ原の戦いで、信玄が信長の同盟者、徳川家康の領国三河を攻め、大勝します。

三方ヶ原の戦いでの信玄の勝利は早速各方面に伝わり、反信長陣営を勇気づけました。

信玄は、朝倉義景宛書状で勝利を報じ、松永久秀は、京都への軍事行動を視野に入れ、信長を追い詰める好機と喜びました。

しかし、信玄らの思いをよそに12月朝倉義景が越前に引き上げてしまいます。これにより信長包囲網にゆるみが生じ、信玄にとって絶望的な事態となりました。



反信長連合(池上裕子『織豊政権と江戸幕府』講談社より)

4-12 反信長連合を解体

元龜4年(1573)1月・2月には反信長陣営はまだ高揚していました。顯如^{よしかげ}は義景宛書状で、伊勢長島の門徒らが岐阜城の近く^{ぎふ}に新たな要塞を構え軍事行動をしていること、近江でも浅井軍に勝る勢いで門徒が粉骨していること、謙信が出陣している越中では加賀の門徒が対戦していることなどを報じています。信玄は顯如や義景らと連絡を密にし、近江・三河・尾張・美濃の門徒に決起を働きかけ続けます。

信玄の死

信玄は三方ヶ原^{みかたがはら}の近くで年を越すとすぐに三河に入り、野田城を攻めて2月にはこれを攻略します。また、調略により東美濃の三か城の城兵を寝返らせます。しかし、この頃、信玄の病状は悪化していて帰国の途に就かざるを得ませんでした。4月、甲斐^{かい}へ向かう途中の信濃国駒場で、53歳の生涯を終えます。信玄にとっては無念の死であり、3年間死を隠すことを遺言したといわれています。

義昭の出兵

元龜4年(1573)1月、義昭^{よしあき}は三方ヶ原における武田軍勝利の報を受けて、それまでの信長との表面的な友好関係を脱し、自ら二条城に籠って挙兵します。義昭との講和を拒絶された信長は3月末、ついに京都へ出兵しますが、天皇の勅命で4月に講和を結びます。

同年7月、信長との和睦から3か月ほどで義昭が再び挙兵しますが、信長は槇島城^{まきしまじょう}に籠る義昭を攻め、追放しました。

浅井・朝倉氏の滅亡

直後の8月2日には、淀城に立て籠る三好三人衆^{いわなりともみち}の岩成友通を討ち取ります。

8月8日、浅井長政配下の阿閉貞征^{あつじさだゆき}が降伏したのを受け、信長が小谷城^{おだに}を包囲して浅井氏を追い込むと、義景の軍勢が浅井氏の救援に現れますが、信長は朝倉勢を攻め降参させます。そして、撤退する朝倉軍を追撃し、刀根坂^{とねさか}の戦いなどで撃破し、越前まで乱入します。8月20日に義景を自害させると、すぐさま小谷城を攻め、9月1日に長政も自害に追い込み、ここに浅井・朝倉連合軍との長年の争いが終結します。

11月には三好義継を若江城の戦いで自害させ、翌月松永久秀を降し、反信長連合は瓦解しました。

3度目の長島攻撃

天正2年(1574)7月、信長は3度目の長島攻撃を開始します。信長本隊は早尾口から進軍し、東の市江口からは嫡男・信忠隊、西の賀島口からは柴田勝家隊が進軍します。さらに海上からは志摩の水軍を指揮する九鬼嘉隆^{くきよしたか}隊や信長の次男・信雄^{のぶかつ}隊が進軍します。この嘉隆・信雄の大船団の威力は大きく、長島方に甚大な被害を与えます。信長軍は鉄砲攻撃や大砲攻撃を継続するとともに兵糧攻めを行ない、長島方は食糧不足から餓死者が続出し、2つの砦は落ち、風雨に紛れて砦から脱出した男女1,000人余りが信長軍に斬り殺されました。3か月にわたる籠城戦が続きましたが、9月29日、ついに長島方は降伏します。門徒衆は船で逃げますが、待ちかまえる信長軍の鉄砲隊に撃たれ、多くは川の中へ落とされました。砦に残る男女20,000人余りは、周囲に柵を設けて閉じ込められ、火を放たれ焼き殺され、3か月に及ぶ戦いは幕を閉じました。

信長は書状に、長島一揆を「根切」にする方針であったこと、一揆を退治するのは信長一人のためでなく、天下のためであったことを書いています。

4-13 長篠・設楽原の戦い



天正3(1575)年5月、三河(愛知県)^{したらかはら}設楽原における^{たけだかつより}武田勝頼と、織田・徳川連合軍との戦いが起こります。信長の戦術がこれほどの中した合戦は他にないといわれ、信長にとって会心の一戦とされています。

武田勝頼進軍

天正3年(1575)、武田信玄の後継者となった勝頼は、遠江・三河を再掌握すべく1万数千の大軍を率いて三河へ侵攻し、5月には長篠城を包囲します。対抗する織田・徳川連合軍は、信長軍30,000と家康軍8,000とされ、5月18日に^{ながしの}長篠城手前の設楽原に陣を張ります。設楽原は丘陵地が南北に連なる見通しの悪い場所でしたが、信長はその地形を利用し、武田軍から見えなように30,000の軍勢を分割して布陣させ、防御の陣形をとろうと考えました。川の両側にある斜面を削り急斜面を造り、土塁に馬防柵を設けることで鉄砲隊を守りながら、武田の騎馬隊を迎撃する戦術を立てます。

一方の武田陣営では信長自らの出陣を聞きつけ、軍議が開かれましたが、多くの重臣たちが勝頼に撤退を進言したといわれています。しかし、勝頼は翻意せず、12,000の兵を設楽原へ向け決戦を敢行します。

^{とびがすやま}鳶ヶ巣山攻防戦

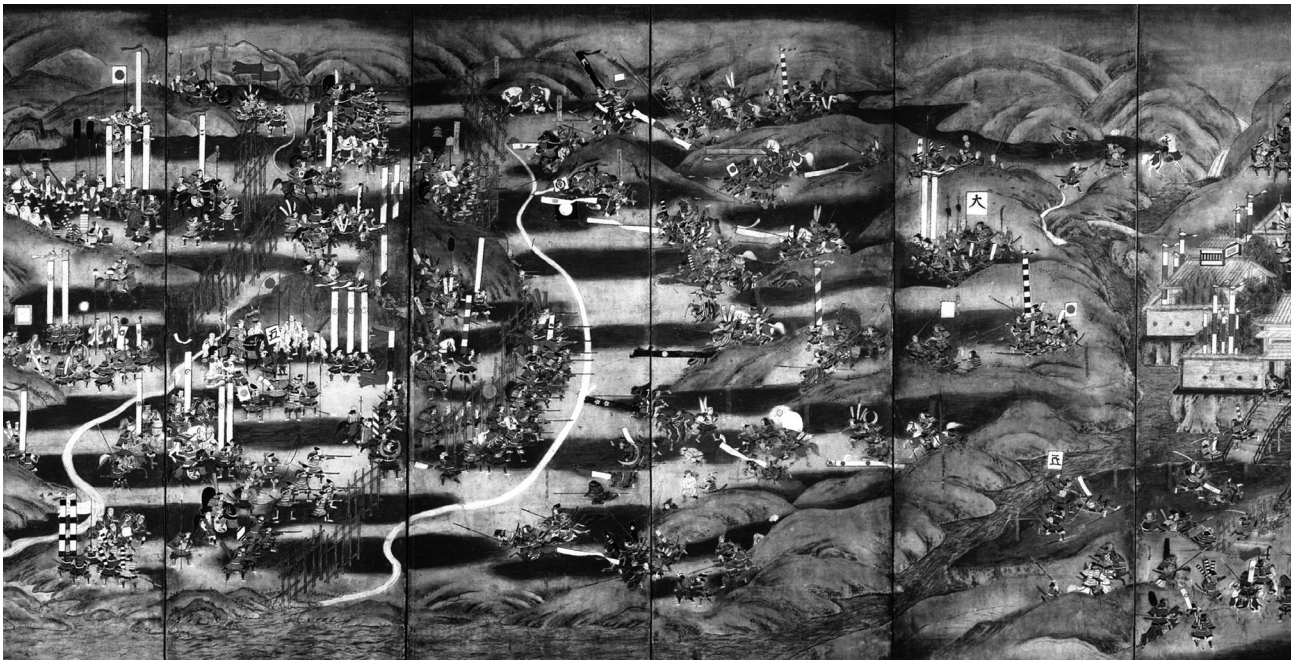
5月20日夜、信長は徳川連合軍の弓・鉄砲に優れた兵2,000ほどを酒井忠次に率いさせ、これに信長自身の鉄砲隊500などを加えた約4,000の別働隊を組織しました。そして、2方面から奇襲をかけ、鳶ヶ巣山砦を完全に落とします。この別働隊によって、織田・徳川連合軍は長篠城の救援という目的を果たし優位に戦いを進めました。

設楽原決戦

翌5月21日早朝、設楽原に到着した武田軍が織田・徳川連合軍への攻撃を開始します。激しい戦いは約8時間にも及びましたが、武田軍は10,000以上の犠牲を出したとされており、織田・徳川連合軍が勝利します。信玄以来の重臣の多くを失った勝頼は、わずかな家臣とともに信濃のたかとお高遠城に後退します。

戦後の影響

長篠における大勝利、また、石山本願寺との和睦で、信長は反信長勢力を抑え込みました。徳川家康は諏訪原城、二俣城ふたまたを攻略するなど、遠江を完全に掌握していきます。



長篠の合戦図屏風(大阪城天守閣蔵)

4-14 越前一向一揆の殲滅

信長は伊勢長島一向一揆に続き、本願寺と通じる越前一向一揆を攻めます。長島、越前ともに、少しの妥協も許さない徹底的な撲滅戦闘となります。

越前一向一揆の内紛

越前国の大名、朝倉義景あさくらよしかげは織田軍と再三の戦を繰り返しますが、天正元年(1573)、最期は賢松寺で自害を遂げます。越前は朝倉氏が滅んだ後、信長の支配下にありましたが、守護の前波吉継まえばよしつぐ殺害の争乱に乗じて、越前一向一揆が蜂起し、朝倉方の富田長繁とだながしげ、さらに朝倉景鏡あさくらかげあきらを攻め滅ぼします。本願寺顕如は加賀に続き越前も領国化するため、大坂、加賀から武将を派遣し支配を強めます。しかし、本願寺から派遣された下間頼照しもつまらいしょうが悪政をしいたことから一揆勢の中で内部分裂が発生し、混乱した状況にありました。

信長出陣

信長は越前が本願寺の領国となったことに危機感を抱いていましたが、この好機を活かすため、大軍を率いて越前に向かいます。織田軍は、越前牢人衆を先頭に、佐久間信盛さくまのぶもり・柴田勝家たきがけかつやす・滝川一益などの重臣や連枝衆(織田の一門衆)合わせておよそ30,000、さらに水軍、信長本隊およそ10,000の総勢40,000以上の大軍で攻め込みます。対する一揆衆も加賀からの援軍を加え、城、砦を構えて迎え撃ちます。信長の巧妙な作戦の前に、結果は一方的な織田軍の勝利となります。『信長公記』しんちょうこうきには奴隸の身分に落とされた者、斬首されたものを合わせ30,000から40,000と記されています。この時に前田利家が捕らえた1,000ほどの門徒を、磔はりつけや釜茹かまゆでにするなどして処刑した、という話もあります。伊勢長島と同じく、一向宗に関しては敵対を続ける限り、徹底して殲滅するという信長の方針が貫かれています。

こうして越前は信長の支配下に戻り、信長は柴田勝家に越前一国49万石という大領を与え、北陸方面の攻略を担当する軍団長に任命します。

4-15 権大納言・右大将となる

越前一向一揆の討伐が完了した後、信長は朝廷官位において、足利義昭より格上の右近衛大将に任じられ、政権を確立させていきます。

あしかがよしあき

うこのえのだいしょう

天下人公認

天正3年(1575)11月4日、信長は昇殿して
従三位権大納言に叙任され、7日には右近衛大将に任じられます。この右近衛大将は征夷大將軍と同格であり、朝廷から信長が武門の棟梁であると認められたこととなります。義昭は右近衛中將でもあり、近衛府においては信長が義昭よりも格上の地位に置かれたこととなります。かつては源頼朝もこの地位につくことで政権を樹立させています。この時点で信長の覇権はほぼ確立されたといえます。この時から信長は「上様」という尊称で呼ばれるようになります。

信長は右近衛大將就任にあたり、御所にて公卿を集め、室町將軍家の將軍就任式に倣った儀礼を執り行ないました。信長は朝廷を否定せず、官位に叙任される形をとり、天皇・朝廷を支えてきた公家・寺社に新たに知行地を与えて、その経済基盤を保障する政策をとりました。公家・寺社を温存し利用することで、天下静謐を実現しようしました。天皇・公家も寺社関係者も信長に願いはしますが、信長の機嫌を損ねるようなことはしませんでした。

公家・寺社も天下静謐を実現するための構成要素で、信長にとっては利用価値があったため、公家・寺社から完全に独立して政権が樹立できるとは考えていなかったとされます。

4-16 信忠に岐阜城を譲る

信長は43歳にして19歳の嫡男信忠に家督を譲ります。越前を治め、周辺の情勢がやや平穏に近づいた矢先のことでした。

織田信忠

織田信忠は、弘治3年(1557)、信長の長男として尾張国で生まれます。※生年には諸説有。実母は生駒吉乃いこまきつのとされます。幼名は奇妙丸。元服して勘九郎信重を名乗り、のちに信忠と改めます。

永禄10年(1567)11月武田氏との同盟関係の補強として信忠と武田信玄の六女・松姫と婚約が成立したとされます。

織田・武田間は友好的関係を保ち続けていましたが、永禄年間に武田氏は織田氏の同盟国の三河・遠江とおとうみ方面への侵攻を開始し、元亀3年(1572)に信玄は信長包囲網に呼応して織田領への侵攻を開始したことで、織田・武田間は手切となり、信忠と松姫との婚約は事実上解消されました。以後、織田・武田間の和睦が成立することはありませんでした。

信忠は信長に従って石山合戦、天正2年(1574)2月の岩村城の戦い、7月～9月の伊勢長島攻めと各地を転戦します。天正3年(1575)5月の長篠・設楽原ながしの したらかはらの戦いに勝利し、そのまま岩村城攻めの総大将として出陣(岩村城の戦い)、以後、一連の武田氏との戦いにおいても、武名を上げます。



織田信忠像(東京大学史料編纂所蔵)模写

信忠家督相続

信長は東美濃の要・岩村城を陥落させた信忠を正室・濃姫の養子とします。天正3年(1575)岐阜城の城主とし、織田家の家督及び美濃、尾張の2か国などの織田家の領国(織田直轄領)を譲ります。信忠は信長の後継者であるとともに、連枝衆筆頭として信長権力の一翼を担う存在でした。この後^{ぎふ}岐阜城の整備改修は信忠によって更に進められました。

同年に正五位下に叙せられ、^{あきたじょうのすけ}秋田城介(出羽国^{でわのくに}の秋田城を専管した国司)に任官し將軍格となることを目指します。

しかし、官位については、信忠より次男^{のぶかつ}信雄の昇進が先となりました。それは信雄が伊勢国司家の^{きたばたけ}北畠継承者であったためで、2年後の信忠従三位中将の叙任でようやく信雄の上の位につきました。

信長は岐阜城を信忠に譲り、完成した安土城に移り住みますが、引き続き織田政権の政治・全軍を総括する立場にありました。信長は安土城を拠点に天下統一に邁進することとなります。